

一球通信 vol.151

*****コンテンツ*****

1. 一球会秋季総会及び懇親会レポート
2. 前主将、マネージャー長より一言
3. 広商交流 50 周年企画

(1) 栗 圭史郎 (現 3 年)

〔2〕 プレーバック交流史

(1) 池田茂樹様 (S4 6 卒)

1. 令和元年度一球会 秋季総会・懇親会レポート

文責：2年 浅川

去る11月22日（金）如水会館にて、令和元年度秋季総会並びに懇親会が行われました。お足元の悪い中、ご参加いただいた皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。OBOGの皆様には後日、総会資料をメール送信させていただきます

〈秋季総会〉

はじめに今井会長よりご挨拶を頂きました。秋季リーグ戦の総評、引退した4年への労いに加え、2023年に迎える硬式野球部創部100周年に向けての事業計画案をお話し頂きました。100周年記念に向けて、詳細が整いましたらOBの皆様へご連絡させていただきます。部員からは前監督小野、前主将大北からリーグ戦総括、結果報告を行いました。その後審議事項に移り、決算報告・予算案等の提案並びに承認を頂きました。今総会での承認事項は以下の通りです。

- ・令和2年度上半期予算
- ・2020年度設備等助成金計画
- ・現役部員部費の値上げ（半期3000円から5000円へ）
- ・H14卒 荻田様の世話人会新任
- ・来年度新幹部案

OBOGの皆様には硬式野球部のさらなる発展に向けてますますのご支援を宜しくお願い申し上げます。



〈懇親会〉

総会に続き同会場で懇親会を開催しました。H51卒高橋様の進行の元、乾杯に始まりその後、広商交流の思い出としてH51卒飯島様・現2年高崎による交流紹介が行われました。飯島様は写真を複数枚用いて近年とは異なる広商との交流の様子、当時飯島様がもっておられた学級の様子、一橋大学との関連を語って頂きました。（一球通信前月号に当時のご様子が伝わるご寄稿文を掲載しております。）また、高崎は前年の合宿の様子（トレーニング内容、一日の流れ等）を話しました。広商との交流は各年代によってあり方が異なり、現役部員の中には現在とは異なる交流の様子を初めて知る者もいました。OBOGの皆様・現役

部員双方にとって理解を深めることのできる機会となったのではないかと思います。
その後、来春卒業予定の4年より進路先報告とこれまでの野球部生活における OBOG の皆様への感謝の思いを含めた挨拶がありました。卒業まではまだ日がありますので、まだまだグラウンドに来て鼓舞して頂けると現役としては嬉しい限りです。
最後に複数名の OBOG の方よりご挨拶頂き、中締めの挨拶をもって閉会となりました。



2. 前主将、マネージャー長 より

お世話になっております。4年の大北です。今季のリーグ戦は3部昇格はおろか、4部優勝さえもできないという結果に終わり、非常に悔しいシーズンとなりました。個人的にも年間を通じて満足に試合に出ることが出来ず、最後のシーズンを終えることとなりました。しかし、その中でも試合に来てくださる保護者の皆様、OB、OGの皆様から温かいお言葉を多くいただきました。結果という形でお応えすることは出来ませんでしたが、後輩が来季必ず3部昇格を成し遂げてくれると信じています。今後とも応援の程よろしくお願い致します。さて、私自身学生野球を終え、現在はアルバイトと教習に明け暮れる日々ですが、やはり心のどこかに部のこと、野球のことが頭にあり、入替戦の観戦や部室の荷物整理などをしてると名残惜しくなっていました。後悔なく引退するという事は難しいかもしれませんが、後輩達には是非やり切ってもらいたいと思います。私も今後は一人のOBとして部の活動に貢献できればと思います。若輩者ではありますが、何卒よろしくお願い致します。

4年 大北啓史

一球会 OB・OGの皆様

御世話になっております。先日野球部を引退しました4年の渡辺です。

まずは引退して間もないこの時期にこのように一球通信に寄稿させていただき、現役時代に一番にお世話になりましたOB・OGの皆様へ改めて感謝を申し上げる機会をいただけたこと、編集の浅川に御礼申し上げます。

私が野球部に入部したのは、ただただ野球が好きで、せっかく入学した一橋大学の野球部に少しでも近くで携わりたいという想いからです。その頃はマネージャーとしての野球部への携わり方の難しさ等、想像する由もなく入部したため入部以降はこの点に大変苦しんだりもしておりました。想像以上の忙しさ、立場の難しさに心が折れそうになることも懐かしく思い出せます。

丁度部活動にも慣れてきた夏ごろ、当時4年生の橋野先輩が私に最初に与えてくださった大きな仕事が、広報(公式ホームページの更新等)と一球通信の編集のお仕事でした。それまで偉大な先輩がやっていたものを私が引き継ぐのは少しプレッシャーでもありましたがこういったお仕事をさせていただけたのは私のマネージャー生活の中で大きな起点になったと今感じております。広報の仕事を通じて、OB・OGの皆様の温かい御言葉をいただいたり、御声援・御協力をいただくなかで、それまでより一層野球部の活動にかかわってくださる方々の存在の大きさに触れることができ、自分の原動力になりました。またそうしていつも応援してくださる皆様のためにも自分が野球部を強くしなくてはという想いから一部員としての貢献の幅も大いに広がり、自分自身にとってもより充実したマネージャー生活

を送ることができました。OB・OGの皆様なしには野球部が成り立ちませんし、私が4年間情熱を持って野球部で活動できることもありませんでした。本当にありがとうございました。

野球部を引退しましたが、今後は一部員としてではなくOGとして、野球部にできることをやっていきたいと考えております。皆様がそうして下さったように、私も現役部員として一橋大学硬式野球部に対して愛をもってこれからも接してゆきたいと思います。

野球部と一球会のますますの発展を願って

令和元年11月25日

渡辺 佳奈



.....

3. 広商交流 50 周年企画

(1) 粟 圭史郎 (現3年)

〔2〕 プレーバック交流史

(1) S46 卒 池田茂樹様

.....

広商交流 50 周年に寄せて

現 3 年 粟 圭史郎

一球通信読者の皆様、日頃より硬式野球部の活動をご支援いただき誠にありがとうございます。今回は私、3 年粟圭史郎が現在の広商合宿の様子をお伝えさせていただきます。

ここ数年は 1、2、3 年の全選手が年末の約 1 週間広島商業高校での合宿に参加しています。宿舎は広商の隣の川の渡った先にある三菱重工広島さんの寮を利用しています。1 ヶ月ほど合宿をしていた頃やホームステイをしていた頃と比べると合宿の規模はコンパクトになっています。それでも、野球の技術はもちろん、取り組み方、考え方など学ぶことは多く、貴重な経験をする事ができています。練習の最初のアップからとにかく走ります。私たちの普段のアップは体を温めて練習に臨むものですが、広商は「鍛える」ことまで目的として意識の違いを痛感しました。一橋の選手はとにかくついていくことに必死ですが、広商の選手は其中でもお互いに指摘し合い、雰囲気盛り上げていて、日頃からの意識の高さを感じます。アップの後はキャッチボールをし、守備練習に移ります。守備練習で感じることは広商の先生方のノックの技術の高さです。左右に振ったり、緩急をつけたりと「こういうノックを受けると上手くなるのだな」と思います。また、ノッカーはギリギリの打球を打ち、選手は必死に捕りにいきとんと喧嘩のような雰囲気になっていきます。それだけの厳しい雰囲気が大切なのだとても勉強になります。昼食は基本お弁当ですが、保護者の方々が炊き出しをしてくださったこともあります。とてもおいしいカレーでした。選手や監督だけでなく、多くの方が 1 つの目標に向けて協力しているのだと思いました。午後からはその日によって練習内容が異なりますが、一番印象に残っているのは走塁練習です。ここまで考えているのかと勉強になることがたくさんありました。特に印象に残っているのは「練習では難しいことをやろう」という考え方です。一塁ランナーは練習では足から帰塁することで反応を磨き、試合では頭から帰塁することで余裕をもつことができるというよう教えられました。この言葉は他の練習にも応用することができとても勉強になりました。時代が変わっても、伝統的な走塁を重視するスタイルは変わっていないのだと感じます。

ここまで私たちが学ばせていただいたことを書きましたが、最後に学習面についてご紹介します。勉強の時間では広商の選手と交流することができる大切な時間です。グラウンドとはまた別的高校生らしい表情を見ることができ少し安心しました。また、一年生が 3 人ほど広商の全部員に対し「目標を達成するために必要なこと」という題で受験勉強の経験を話す講演会を行います。野球と勉強という面では異なりますが、1 つの目標に向けて努力した経験を話して欲しいという広商の先生方からご提案いただき行っています。微力ではありますが、こうしたことを通じて少しでも Win-Win の合宿にできればと思います。今年の

合宿も来月末に行います。国立で練習しているだけではわからないものを少しでも多く学んで来たいと思います。今年の夏15年ぶりに広商が甲子園に出場しました。1つの目標を

達成した広商に負けないように私たちも来年の春に4部優勝、3部昇格を果たし、来年の秋に3部の舞台で戦う実力をつけて帰って来たいと思います。皆様のご期待に添えるように努めて参りますので、今後とも応援のほど宜しくお願い致します。

3年栗圭史郎



(2018年12月撮影 主将大北 以下一橋部員24名)

【プレイバック交流史・一橋池田さん広商野球部 100 年史寄稿】

歳月を忘れさせる思い出

池田 茂樹

(昭和46年一橋大学社会学部卒、愛媛県愛光学園出身)
トリニティ・ジャパン・ジェンパー(株)代表取締役



今般の広島商業高校野球部100周年記念史の編集に際し、是非、私も寄稿し参加させて頂きたいとお願いをした次第であります。100年と言う明治、大正、昭和、平成へと日本の歴史が様々な変遷を経ながら近代・現代を歩む中で、この間、広商野球部が創造し、醸成してきた伝統そのものが、私にとっ

ても、社会人になってからの私の人生、仕事に於いて、いかに大きな影響を与えたか計り知れないものがあったからです。

今、改めて振り返って見ますと、広商野球部の伝統そのものが、いかなる時代の変遷、変化を問わない永遠の人間教育であり、人生の教訓であったと強く感じております。

時は、昭和43年11月初め、私は2年生、ちょうど秋季シーズンの終了後、当時の広商島山先生との出会いに遡ります。その頃の日本は、昭和30年代の重化学工業の振興政策後、供給過剰による昭和41年の不況から立ち直り、高度成長へと向う中にあり、一方では東大の安田講堂籠城に代表される学生運動が例を見ない盛り上がりを見せ、日本全体が騒然且つ活気溢れる時代背景にありました。

島山先生は、広島から一橋大学商学部山城ゼミに、留学をされていました。野球部の練習休日のある日、私の野球部同期生新田君が私の下宿に駆け込んできました。彼は驚いた形相で、今日たまたまグラウンドに行ったら、広商の島山さんと言う人が来ていて、一橋野球部の練習を手伝いたいと言っているがとの話がありました。我々は即、部内の連絡を取り、先生にアポイントを申し入れ、早速、翌日、部の練習時にグラウンドでお会いする事としました。そこで、我々一同は先生より自己紹介を頂きました。今でこそ穏やかな目差しをしておりますが、当時先生は38才、広島訛りで、いかにも勝負の世界に生きてきた眼光の鋭さは今でも鮮烈に覚えています。山城ゼミ留学も終盤にさしかかり、留学以来いったん野球を忘れ、勉学に専念されてきた様ですが、お世話になった一橋に何かお礼をしたいとの事で、当方野球部の役に立ちたいとの申し出がありました。その時は、広商という名前と共に先生の迫力ある人間性に圧倒され我々一同、二

つ返事で是非お願いしますと全員頭を下げました。当時の一橋野球部は、東部リーグの3部と4部(リーグは4部まで)を往復、監督はおらず、練習と試合は先輩からの慣習を継承、ただ練習量の多さのみで、野球経験者の少ない弱小チームをカバーする野球部でありました。この島山先生との出会いが、現在30年を超えて、広商と一橋との密度の濃い交流が続くとは誰が想像したでしょう。

先生と出会ったその日から、先生の練習が始まりました。キャッチボール、簡単な連繋プレー、内外野守備へのノックというものでした。その中で、数十センチと違わぬノックには驚かされました。その日、先生が再三言われた事は、「相手に対しボールに気持ちを込めて投げろ」と言う事でした。これで暴投、乱球が即、見事に減りました。この言葉は強烈な印象を残し、今でも私の耳にこびりついて、後年、これがわたしの集中力の養成、又、相手の状況を考えての習慣が育成され、相手と物事に対処する上で、仕事にも大いに役立ったと思っています。

先生にはお忙しい勉学の傍ら、野球部の練習に情熱を注いで頂きました。先生の教えとは、まず野球は絶対勝つ事である。その為に、勝負の戦略を明確に確立し、その戦術をベンチを含め全員が徹底すると言うものでした。先生の在東京期間は残り少なく、とにかく君達は理解力はあるのだから、短期間で私の教える事を吸収して欲しいとの事で、集中的に数週間のきめ細かい練習を繰り返しました。

11月の終わりの或る日、先生から一度実践練習をして見ましょうとの提案があり、練習試合の相手は東部リーグ一部の雄、亜細亜大学という事でした。当方全員腰を抜かさなばかりに驚きました。その後、すぐ東大との練習試合と続く後述するこの二試合で、先生に教えられた当方野球部の取った戦略、戦術の中に、広商野球部そのものの真髓が象徴的に込められていたと思います。

当時は、学生野球、特に東京六大学は全盛期を迎え、法政の山本浩二(元広島)、田淵(元阪神、西武)、富田(元現日本ハム)、早稲田の谷沢(元中日)、荒川(元ヤクルト)、明治の星野仙(現中日)、東大の井手(元中日)等その他主なレギュラーのほとんどがプロ野球に入団した状況にあり、プロより強いのではないかと言われていた時代です。

一方、東都大学リーグは、打倒六大学を目指し、各大学共力を入れていました。その東部の雄、亜細亜大学との練習試合です。いよいよ試合の当日、我々部員は秋季シーズン後、4年生が抜けた為、総勢15名弱、亜細亜のグラウンドのある東京都日の出村に行き、改めて驚きました。100数十名の部員がグラウンド一杯に柔軟体操をしており、その光景に圧倒された訳です。亜細亜のメンバーは、ピッチャーを除き全員レギュラーで臨むとの事に更に驚きました。当時の亜細亜のメンバーは、広商でキャプテンを務めたショート of 佐々木、松山商業出身のレフト篠田、崇徳でキャプテンを務めたサード上柏、同じく崇徳出身のキャッチャー土取、又東都大学の三振奪取王、後に阪神タイガースに入団し、大活躍した広商出身の左腕投手山本和行等、中・四国を代表するそうそうたる選手が揃っていました。監督には愛媛県西条高校を率いて、全国制覇を成し遂げた矢野監督がいました。私は投手として、三部リーグの秋季シーズンでは、春季一位の学習院、二位の上智戦に各々2勝を挙げ絶好調でしたが、その後、肩の要調をきたした時であり、亜細亜大戦にはとにかく聞き直って挑んでいこうと考えました。

まず作戦は、ベンチ一丸となった声による相手を心理的に攪乱する戦法。島山先生との練習通り、全員がメガホン片手に相手のピッチャーとキャッチャーに向かって「ストレートを狙え」との大声を出す。すると相手は心理的に当惑してカーブを投げ、ボールとなる。結果カウント1-3となった所で、次の球を狙えとの全員の声でプレッシャーをかけた結果ボールとなり、四球を得る。又、今度は相手ピッチャー有利の時、カーブの配給を想定し、「カーブを狙え」との声と共に、当方の打者はストレートに的を絞って思い切り振った結果、ヒットになったり、当方側の声とサインの違いに相手は攪乱され、よく塁に出る事が出来ました。早くも二回表、1アウト満塁の絶好のチャンスが来ました。サインは打て、そこでは単純に打者に打たせ点を取る事が出来なかった。先生がここでチャンスに簡単に打たせた事は、この試合の流れは、後でチャンスが必ず来るとの戦況判断より、これから述べる戦術を成功させる伏線でした。ついに決定的チャンスがやってきました。五回表1アウト2-1と追い込まれました。そこでピッチャー有利、三振を狙って変

化球を投げて来ると読み、先生の瞬時の判断で、全員「カーブを狙え」との大合唱。一方、先生のサインはツーランスクイズでした。予想通りのストレートに打者は的確にバントを決め、見事にツーランスクイズを成功させました。相手は二回表のチャンスに単純に打った事もあり、まさか2-1からスクイズする事は全く予想しておらず、更にこの状況でのツーランスクイズとは亜細亜の野球にない、未開発の戦術であり、防御体制がなかったと後で言っていたと聞いております。

亜細亜の混乱の中で、同じく七回表にも1アウト2-3塁からツーランスクイズを決め、この戦法だけで4点をもぎ取ったわけです。亜細亜はもしこの試合に負けたら全員丸坊主になるとしていた為、我々に必死で向かってきました。結局九回表まで当方側は6対5で勝っていたが、九回裏2アウト満塁で一二塁間に打たれ、惜しくもこれを取る事が出来ず、7-6の逆転負けを喫しました。我々は残念ではあったが、亜細亜との試合に善戦し、島山先生との1ヶ月足らずの練習の中で、先生に教えられたものが実践出来た事に満足でありました。

この試合に見られる様に、先生との練習で培ったものは、試合の戦況判断の中で戦略を考え、それに応じた戦術を集中力を持って全員で挑むという事でした。後日、亜細亜は、この試合は亜細亜にとり一橋の集中力とこれに基づく亜細亜も未開発の一橋の戦法を見て、野球は奥深く無限の可能性のあるものと改めて考えさせられたとの談があったとの事でした。その後、亜細亜は翌年山本和行投手を擁し、春・秋連続優勝を成し遂げました。

次に、早速、東大との練習試合を行う事となりました。当時、東大野球部は、国公立の中では最右翼に位置し、強豪が並ぶ東京六大学の中でも中日に入団した井手投手を擁し、善戦をしていた時代でありました。当方側のエラーがらみで、結果は2対3か3対4で負けたと思いますが、この中にも島山先生に教えて頂いた戦法が見事に的中した場面がありました。ランナー1、2塁の場合で、投手がセカンドに2度牽制球を投げ、交互にセカンドとショートがベースカバーに入ります。次の瞬間、振り向き様に1塁に牽制球を投げ、油断している1塁走者をアウトにした場面です。トリックプレーですが、頭脳を使って練習を重ねたプレーでした。

その他亜細亜大戦で駆使した戦術も随所に見せて、1点差の善戦となったが、結局敗戦となりました。試合終了後、島山先生は烈火の如く怒ったのを、今でも鮮明に覚えております。先生はベンチ前に我々全員を集め、激しくグラウンドに響き渡る声でこのように厳しい指摘をしました。

君達は、亜細亜大戦に続き、東大戦にも善戦し満足しているようだが、とんでもない話だ。野球、勝負は勝つことに意義があり、結果は自己で評価するものではない、他人が評価してくるものだ。善戦したことで満足するとは話にならない。よく反省して欲しい。勝負は絶対に勝たなくては行けない。こんな考え方で社会に出て通用しないとの話でありました。あまりに激しい口調に、グラウンドで練習を行っていた東大野球部員が練習の手を休め、驚きのあまり、こちら側をずっと見つめていたと言うほどでした。

後になって、広商から立教大学に進学し、東京海上火災に入社した丸谷栄治君の結婚式に当時の東大野球部のメンバーが列席していて、同席の島山先生に、あの試合は我々も勉強させられました。東大の監督は試合中ずっと一橋の野球のメモを詳細に取っていました。今までに見たこともない野球でした、との後日談を聞きました。

短期間ではありましたが、我々が島山先生から学び確信した広商野球とは次の通りであります。まず勝負事は如何なる理由があろうとも絶対に勝つ事。戦略的には、1点を取り相手に1点をやらない野球を目指し、頭脳及び心技体を駆使してあらゆる戦術を考え実行に移す事。その為には監督が選手の立場に立ち、選手は監督の気持ちになり、ベンチを含めた全員一丸となった総合力を作り上げる事でありました。

1点を取り1点を与えないと言うのは、一見堅く守れという保守的な戦法に見えるが、言いかえれば、戦況に応じてリスクに最大限にチャレンジする事でもあります。例えば、上述の2つの練習試合にあるように、考えられるあらゆる創造力を積極的に生み出し、1点を取る方法を考え、1点を守る事を考えるというものであった。勿論、キャッチボールから相手の気持ちになって、プレーを行う事から、技術面でも基本を忠実に磨く事は言うまでもない。基本をベースに創造に最大限のチャレンジを行い、勝負に勝つ事であった。その後、私が社会に出て、先生の教えが公私共に役に立ったか、筆舌に尽くしがたいものがありました。

善戦は次の勝利へのステップでしかなく、勝負は勝つ事、相手の気持ちと状況の中で対処する事、基本の上に創造力を発揮する事等、数限りない教訓は、私の体の中に徹底的に刻み込まれました。これらの教訓は、時代の変遷と変化を問わない永遠の教育と人生の教訓であると強く思う次第です。あの時、私が社会に出る前に、島山先生から教わった物がなければ、また違った人間になっていたと思います。人は教育とその実践によって大きく変わる事を痛感しました。昨今言われる少年問題も教育不在に起因するものであるとつくづく思います。

その後、昭和45年私が4年の夏、野球部全員で広島に合宿に行き、練習をさせて頂き、その夏の神戸で行われた神戸大学、大阪市立大学との旧三商大定期戦では戦後初めて優勝し、また秋のシーズンでは優勝争いをし、私自身も防御率0.4点と絶好のシーズンを終える事が出来ました。やれば必ず出来ると、来たる社会人に向け自信と確信を得る事が出来ました。

島山圭司先生との出会いから30年超が経過し、その後、毎年密度の濃い広商と一橋の交流が継続し、一昨年東京にて30周年記念パーティーを盛大に行いました。

広商野球部の伝統そのものが即ち教育であり、人生の教訓でありました。これからどんなに時代が変化しても、その伝統は不滅でありつづけましょう。

私にとっても、当時学んだ野球の技術は勿論、それ以上に社会に出てから今日に至るまでの人生を歩む中で、先生から学んだ基本精神・戦略・戦術が大きな影響を与えました。また、今後もそうであります。

社会に出てからの様々な場面・場面で、先生だったら「どんな手を打つのだろう」とか、勝負の局面では、先生の「もっと考えろ」「絶対に勝て」との叱咤激励の声が遠く広島から聞こえてきた様な気がします。

広商野球部100周年記念史に対し、改めて心より島山先生と広商関係者の皆様に敬意と感謝を申し上げたい。今度は広商、一橋野球部の交流100周年を期待する次第であります。

最後に、島山圭司先生が今まで歩んでこられた人生は、いかばかりに大変であったかと勝手に想像させて頂き、改めて敬意の念をここに申し添えさせて頂きたいと思います。

(池田 記)

今月も一球通信をご覧頂きまして、誠にありがとうございます。

報告させていただきました通り、去る 11 月 22 日に秋季総会が盛会に終わりました。OBOG の方と時間をとってお話のできる非常に有意義な時間となりました。現役はもちろん、OBOG の皆様におかれましても親睦を深めることのできる場にできるよう務めて参りますので、皆様からのご参加をお待ちしております。

12 月 2 日には年内最後のオープン戦として東京大学との一戦を予定しております。手足の冷える中ではございますが、ぜひご観戦、ご声援いただけますと幸いです。

今後とも一橋大学硬式野球部へのご声援のほど宜しくお願い申し上げます。

一橋大学硬式野球部

2 年マネージャー 浅川彩音

一橋大学硬式野球部公式ホームページはこちら↓

<http://jfn.josuikai.net/circles/sports/hit-u-bbc/>

↓ご意見・ご要望・配信停止等のご連絡等はこちらまで↓

hit.u.bbc.mg@gmail.com

ホームページ、OB ページのパスワード↓

【hitbbc】